

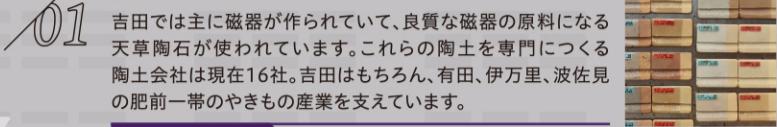
工程

肥前吉田焼の製造工程

デザインに合わせ、必要な工程を経て完成する。

町を流れる吉田川は、かつて水路で流通を支えた塩田川へ続ります。古くからこの川沿いには磁器の原料を作る陶土会社が点在し、今も良質の陶土を作っています。そばには量産を支える生地製造専門の業者も。地域で分業できる環境は特産地ならではです。

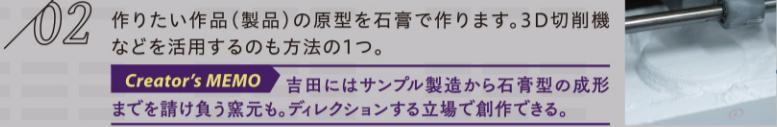
process / 陶土を選ぶ



吉田では主に磁器が作られていて、良質な磁器の原料になる天草陶石が使われています。これらの陶土を専門につくる陶土会社は現在16社。吉田はもちろん、有田、伊万里、波佐見の肥前一帯のやきもの産業を支えています。

Creator's MEMO 使う陶土によって表情も様々な仕上がりに。完成をイメージして自分のものづくりじっくりの土を探す陶土屋さん巡りもおすすめ。

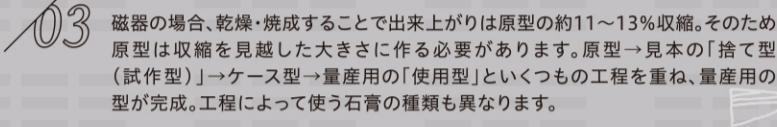
process / 原型を作る



作りたい作品(製品)の原型を石膏で作ります。3D切削機などを活用するものも方法の1つ。

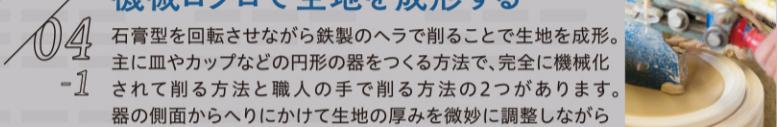
Creator's MEMO 吉田にはサンプル製作から石膏型の成形までを請け負う窯元も。デレクションする立場で創作できる。

process / 石膏型を作る



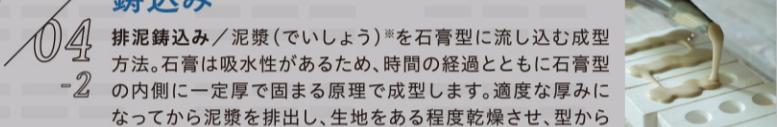
磁器の場合、乾燥・焼成することによって出来上がりは原型の約11~13%収縮。そのため原型は収縮を見越した大きさに作る必要があります。原型→見本の「捨て型(試作型)」→ケース型→量産用の「使用型」といくつの工程を重ね、量産用の型が完成。工程によって使う石膏の種類も異なります。

process / 機械ロクロで生地を成形する



石膏型を回転させながら鉄製のヘラで削ることで生地を成形。主に皿やカップなどの円形の器をつくる方法で、完全に機械化されて削る方法と職人の手で削る方法の2つがあります。器の側面から外へにかけて生地の厚みを微妙に調整しながら削る作業は、見た目以上に技術が必要。収縮で形が変化しないように生地の厚みを調整します。

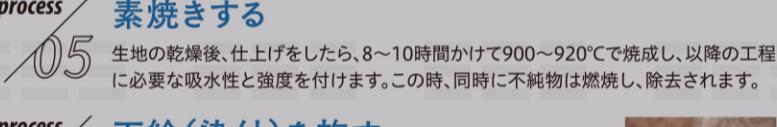
process / 鎔込み



泥漬け込み(泥漬(でいしょ))を石膏型に流し込む成型方法。石膏は吸水性があるため、時間の経過とともに石膏型の内側に一定厚で固まる原理で成型します。適度な厚みになってから泥漿を排出し、生地をある程度乾燥させ、型から外します。主に、花瓶や急須など開口部に向け窄まつた中空の複雑な形状の量産に使用されます。

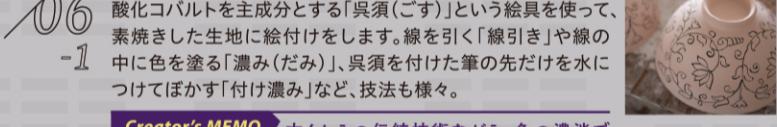
Creator's MEMO 「泥漬け込み」は創造性のある自由な形が可能。「圧力陥込み」は効率的で量産に適している。

process / 素焼きする



生地の乾燥後、仕上げをしたら、8~10時間かけて900~920℃で焼成し、以降の工程に必要な吸水性と強度を付けます。この時、同時に不純物は燃焼し、除去されます。

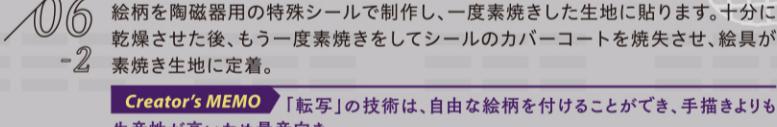
process / 下絵(染付)を施す



酸化バルトを主成分とする「呉須(ごす)」という絵具を使って、素焼きした生地に絵付けをします。線を引く「線引き」や線の中に色を塗る「ぬみ(だみ)」、呉須を付けた筆の先だけを水につけぼかす「つけぬみ」など、技法も様々。

Creator's MEMO 古くからの伝統技術ながら、色の濃淡で自分だけの表現ができるのが魅力。

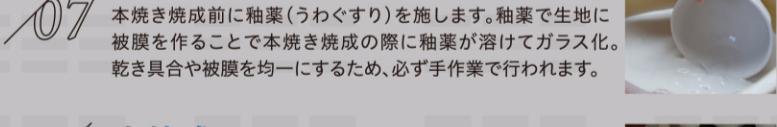
process / 下絵転写する



絵柄を陶磁器用の特殊シールで制作し、一度素焼きした生地に貼ります。十分に乾燥させた後、もう一度素焼きをしてシールのカバーコートを焼失させ、絵具が素焼き生地に定着。

Creator's MEMO 「転写」の技術は、自由な絵柄を付けることができ、手描きよりも生産性が高いため量産向き。

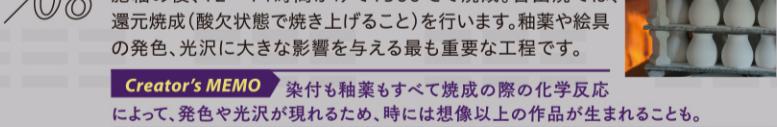
process / 「釉掛け(施釉)」をする



本焼き成前に釉薬(うわぐすり)を施します。釉薬は生地に被覆することで本焼き成の際に釉薬が溶けてガラス化。乾き具合や被膜を均一にするため、必ず手作業で行われます。

Creator's MEMO 象付も釉薬もすべて焼成の際の化学反応によって、発色や光沢が現れため、時には想像以上の作品が生まれることもある。

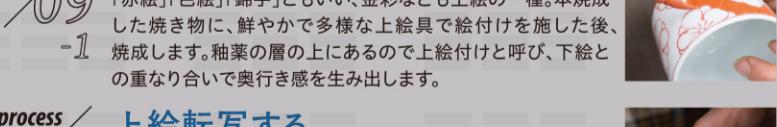
process / 本焼成する



施釉の後、12~14時間かけて1300℃で焼成。吉田焼では、還元焼成(還元状態で焼き上げること)を行います。釉薬や絵具の発色、光沢に大きな影響を与える最も重要な工程です。

Creator's MEMO 象付も釉薬もすべて焼成の際の化学反応によって、発色や光沢が現れため、時には想像以上の作品が生まれることもある。

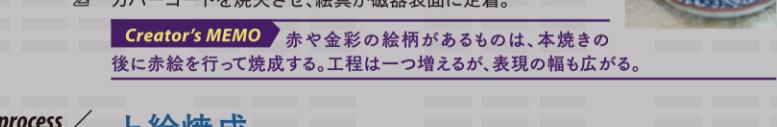
process / 上絵(赤絵)を施す



「赤絵」「色絵」「錦手」ともいい。金彩なども上絵の一種。本焼成した焼き物に、鮮やかで多様な上絵具で絵付けを施した後、焼成します。釉薬の層の上にので上絵付ひとびと、下絵との重なり合いでお美き感を生み出します。

Creator's MEMO 赤や金彩の絵柄があるものは、本焼きの後に赤絵を行って焼成する。工程は一つ増えるが、表現の幅も広がる。

process / 上絵焼成



上絵をした磁器を、電気窯にて本焼成より低い800℃前後で焼成します。焼成温度の低い赤や金色は、釉掛けした磁器に上絵を施し、低温で再度焼くことによって、その鮮やかさを生み出します。

Creator's MEMO 赤や金彩の絵柄があるものは、本焼きの後に赤絵を行って焼成する。工程は一つ増えるが、表現の幅も広がる。

「例えね……」そう言うと、おもむろに彼はラインを描き出した。



Access Information

飛行機
福岡空港 → 福岡空港国際線/スター・ミナル → (高速バス 約70分) → 嬉野バスセンター → (バス 約13分) → 上皿屋
長崎空港 → (タクシー 約40分) → 上皿屋
佐賀空港 → (リムジンタクシー ※予約 約60分) → 上皿屋

JR
JR博多駅 → JR武雄温泉駅 → 嬉野バスセンター → (路線バス 約35分 → 乗り換え 路線バス 約13分) → 上皿屋
JR佐賀駅 → JR肥前鹿島駅 → 鹿島バスセンター → (路線バス 約25分) → 上皿屋

高速道路
九州道鳥栖JCT → 嬉野IC → 上皿屋(約67分)

発行・肥前吉田焼窯元協同組合
〒843-0303 佐賀県嬉野市吉田町4525-1 ☎0954-43-9411
<https://www.yoshidayaki.jp/>



歴史を受け継ぎ、積み上げる?
自分を見つけるために、
壊すことから始めてよいんじゃないかな。
寝りから覚めた印判手仙境図。

恐れないチャレンジからヒットは生まれる。



歴史

肥前吉田焼

四百年以上の歴史を誇る

吉田で陶石が発見された1577年。肥前吉田焼のはじまりは、まさにこの陶石の発見がきっかけといわれています。後に佐賀藩の礎を築いた鍋島直茂が、朝鮮半島から連れて来た陶工達の一部を吉田に送り込み陶磁器製造が始まったといわれています。その後、吉田は佐賀鍋島藩の三支藩の一つ、蓮池藩の領地となり、初代藩主鍋島直澄は陶磁器生産の振興を図りました。1650年代には、いわゆる中国写しの「色絵印判手仙境図」といった吉田オリジナル呉須赤絵様式が確立し、高い技術と感性が磨かれました。1670年代頃には本藩の命で上絵が禁止されたこともあったといわれていますが、赤絵を使わずとも、「雲龍見込荒磯文」の碗など、見事な染付の雜器などを作るようになります。明治に入ると、旧士族たちを中心として陶器製造会社「精成社」を設立します。その後、中国へ販路を拓き、朝鮮への販売拡張に成功。有田焼や波佐見焼も吉田の商社を通して海外へ売られました。

戦後はうれしの茶を特産に持つ地域柄、昔から土瓶や急須などの茶器を製造するところが多い一方、時代に合ったアイデアで独自の道を切り開くスタイルも脈々と受け継がれています。

1 濃みで魅せる「GOSU」ブルー副久製陶所

あえて文様や絵柄を入れず、吳須のブルーだけで勝負する「GOSU」シリーズ。これまでの日用雑器にあったデザインを拭すうとデザインを交えて開発した渾身の品。独自にとっておきのブルー5種類“1.0~5.0”を作り、伝統手法の濃みで小付や小皿、箸置きを染め付け。ほわんと絶妙な風合いでやさしさを表現、一つとして同じものではない。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4099-1 ☎0954-43-9606



2 水玉が進化する副千製陶所

吉田焼の代名詞にもなった水玉の茶瓶や湯呑。白地に紺色の化粧土を打み、丸くくりぬいたデザインだ。代々水玉のモチーフは同じだが、時代の水玉がある。レトロ感ある先代のデザインから、新・今は化粧土の面積を減らし漂としたシンプル感を追求。水玉のマリは「搔き落とし」の技法を探る。イメージ通りの丸を作ろうと、独自で開発した徹底ぶりは見事。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4116-14 ☎0954-43-9704



3 個性で仕掛ける副千製陶所

量産体制から、バリエーションに富む雑器製造に舵を切り、デザインに力を注ぐ。立体圓面から試作型の制作も行い、少量注文にも応えられる柔軟性。加藤の武器に、從来のものにどうわれないデザインを多く仕掛ける。特に茶碗や湯呑生地の表面に化粧土でデコレーションする装飾法「イッchen盛り」を得意とし、新しく、豊かな食卓を創造する。

嬉野市嬉野町大字吉田屋4115 ☎0954-43-9408

4 食卓をくすぐるヘタウマ理論副武製陶所

Tシャツ型の小さな箸置きに染付で描かれているのはお相撲さん。意表をつくお茶目・おセザンなポーズが笑いを誘う。決して芸術的「ウマウマ」であってはいけない。手描きならではの絶妙なヘタウマ加減が“今”的時代を物語る。自由なデザインができるTシャツに想いのヒントを得て、ひと目で笑えるゴリラやおじいさんなどをリーズナブル。柔軟な発想が魅力。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4115 ☎0954-43-9437

5 自由発想で「今」に挑む辻与製陶所

安政年間の商業以来、赤絵や染付、しのぎ等伝統技術を大切にしてきた。そして今、自由なものづくりにも挑む。ダイヤ彫りの銘々皿をはじめ、時代が求める工業製品やオブジェも多く手掛けている。手づくり、手描きならではの良さはそのまま。試作型から自社で作る環境を整え、機能性や造形美を効率的にデザインする強みもある。時代の多様なニーズに応える。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4666 ☎0954-43-9432

6 時代の柄を茶器に写す新日本製陶

完璧な量産体制での土瓶の土瓶や急須の得意とする。「銘版転写」という技術で絵柄を写す業者や、一つの商品を6~7パターンに分けて絵柄だけをする業者で効率的に出荷。すべて手作業だ。主力は時代が好む花柄、ヒョウ柄など特徴的なデザインもある。社長自ら商業施設に営業し、現在の工場直送という独自の販売ルートを開拓した歴史も見逃せない。

嬉野市嬉野町大字下野甲丁2304-1 ☎0954-43-9201

7 食卓を便利に楽しくしたい江口製陶所

手掛けるのはスタイルッシュで効率を求める現代人のための器。中でも「金彩」を融入したプレートシリーズは、飽きのこないシンボル。正方形と長方形が大小あり、スタッキングできる機能性を求める。収納に便利で手軽に食卓の演出ができる。かつては旅館用の茶碗や湯呑を全国に届けていた。「毎回いかに丁寧な仕事をするか」というもののづくりの姿勢は変わらない。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4753 ☎0954-43-9421

8 吉田の素朴さと実用性を売るヤマダイ

地元唯一の産地問屋で、広く全国に吉田焼の魅力を伝える。おおらかな自然の中でのみ作られた吉田焼は、自由で素朴。手描きならではのあたたかさと丈夫さがある。それにリースアリ。家庭用から業務用までぎっしりと在庫をそろえる。嬉野市がお茶の特産地であることをうららかに表現する。吉田焼の発展を古くから支えている。

嬉野市嬉野町大字吉田丁4051 ☎0954-43-9214

嬉野市 広域マップ

URESHINO Area Map



吉田皿屋 町歩きマップ

YOSHIDA Area Map

